「子どもはみんな問題児。を読んで」

 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　佐々木香澄

　子どもはみんな問題児の本を読む前から、作者である中川李枝子先生がみどり保育園で働いていたというのは知っていたのだが、 この本を読んでこどもに寄り添ったあたたかい保育をされていたのだなと感じ、参考になる考え方がたくさんあった。

　まず、本の題名にもある「子どもはみんな問題児」 という考え方だ。 大人になって保育者の立場で子どもたちを見ていると、将来この子はどのような大人になるのだろうと考えることがある。だが、 思い返すと私自身も小さい頃幼稚園に通っていたときは毎日園庭で遊んではけがをしたり、苦手な食べ物があると頑なに食べるのを拒否したりと担任の先生にとっては相当な問題児だったと思う。 だがそんな私をあたたかい目で見守り、 たくさんの愛情を注いでくれたことで、 大人になった今があるのだと感じた。 保育を進める上でも焦らずに、 子どもの心に寄り添って長い目で子どもたちを見守ることを大切に していきたい。

　次に、中川先生も子どもたちと絵本を読むことをとても大切になさっていて、今まで園内研修等で学んできたことに加えてとても参考になった。 絵本の選び方についても述べられていて、 引き続き今の年齢ではこの本と決めつけるのではなく、今のクラスの状態に見合い、大人の視点からでも楽しめる本を選んでいきたい。 絵本を選ぶ際に怖い話は少し避けてしまいたくなりがちだが、子ども達の成長にはとても大切な要素であると思うし、 想像力をより豊かにするためにも大切なものだと改めて感じた。 一人ひとりを膝に乗せて読むというのは難しいと思うが、怖い話でも楽しめ、友達と寄り添って落ち着いて見られる環境を作って行けたらと思う。また、 読み聞かせという言葉についても「読んで聞かせる」「言って聞かせる」という考え方が人によってはあるのだと考えさせられた。 今まで読み聞かせという言葉に対して考えたことがなかった為、共感した。様々な考えがあると思うが、子ども達に対しては 「絵本を一緒に読もう」と言葉をかけていきたい。 絵本を通して身についた想像力で、いつか中川先生のように、保育者自身がきっかけとなり、 お話をつくっていくというおはなしごっこを保育の中で展開できたらいいなと思う。 まだ今のクラスの状態では難しいと思うので、まずは絵本を「また読んでね」と子ども達の方から言ってもらえるくらい楽しめるように、また、遊びや作品展等の行事で子どもが想像力を膨らますことができる環境を作っていくことから取り組んでいきたい。

　この本を読み、 中川先生がみどり保育園で様々な経験をしてきたからこそ素敵な作品が生まれたのだと感じた。今回は保育者の視点から読ませて頂いたが、自分が将来母になったときにもこの本の言葉からたくさんの元気をもらえる素敵な本だと思う。この本で学んだことを参考に、今後の保育に役立てていきたい。